

データで読み解くこれからの信用金庫経営 (8) 預貸率

—近年の預貸率は50%程度で推移する傾向—

ポイント

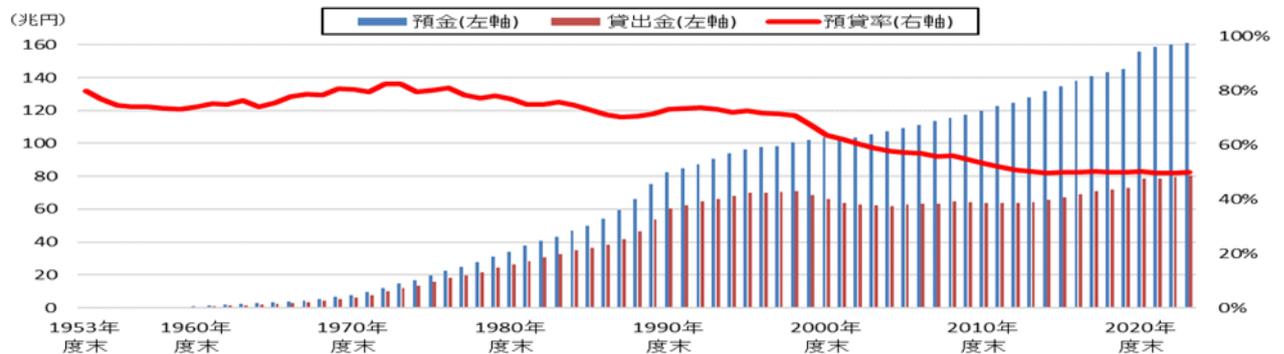
- 2023年度末の信用金庫の預貸率(末残)は、前期比0.1ポイント上昇の49.9%となった。近年5年間の状況を見ると、預貸率は50%程度で推移しており、最近では貸出金の伸びは低い。
- 信用金庫別の預貸率は、信用金庫間でバラツキがみられるが、一部の信用金庫では預貸率が上昇している例もみられる。

1. 預貸率(全国)の状況

2023年度末の信用金庫の預貸率(末残)は、前期比0.1ポイント上昇の49.9%となった。長期的には預貸率は低下傾向にあったが、近年5年間は50%程度で推移しており、最近では預金、貸出金とも伸びは低い(図表1)。

コロナ禍において、実質無利子・無担保の制度融資(いわゆるゼロゼロ融資)の伸びもあり貸出金残高が増加したが、預貸率の上昇に至っていない状況である。

(図表1) 預貸率(全国)の状況

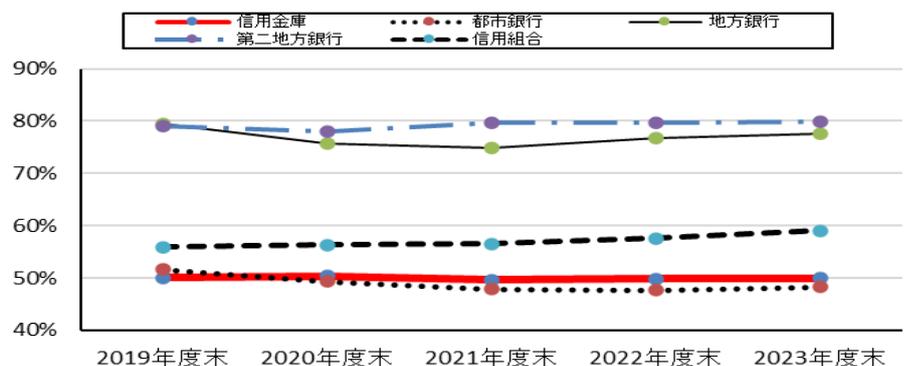


(備考) 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

2. 他業態との比較

近年5年間の預貸率を他業態と比べてみると、信用金庫の預貸率は、地方銀行・第二地方銀行・信用組合を下回って推移している。また、都市銀行の預貸率とほぼ同水準で推移している(図表2)。

(図表2) 預貸率(他業態)の状況



(備考) 1. 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

2. 他業態は全国銀行預金・貸出金速報、全国信用組合主要勘定より作成

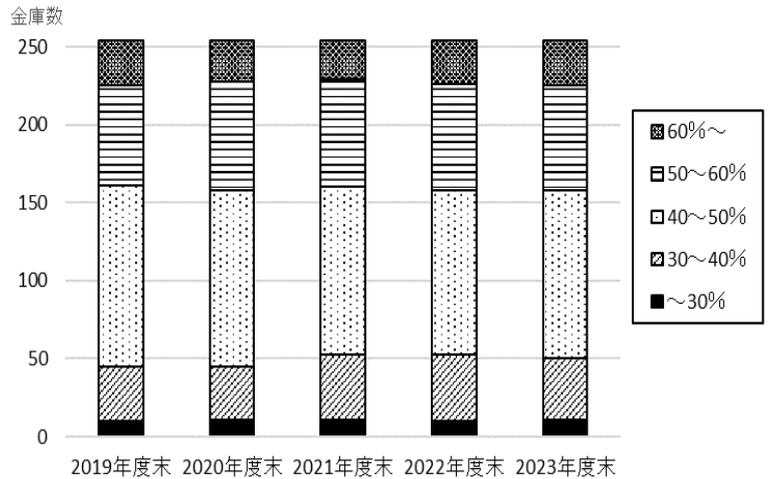
3. 信用金庫別預貸率の状況

次に信用金庫別に、近年5年間における各年度末の預貸率の推移を示したところ(図表3)、年度別の構成比において大きな変化は見られなかった。

分布状況を見ると、大半の信用金庫が全国平均付近の40～50%台となっている。

しかしながら、預貸率60%超や30%以下の信用金庫も一定数みられるなど、信用金庫間でのバラツキがみられる状況である。

(図表3) 信用金庫別預貸率の状況



(備考) 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

4. 預貸率が上昇した信用金庫の特徴

上述の信用金庫別預貸率の状況にもとづき、2期間比較(2019年度末と2023年度末)を行ったところ、半数程度の信用金庫において預貸率の上昇がみられた。

本稿では、当該期間における預貸率の上昇順に、上位の10金庫(上昇幅6%ポイント)について上昇要因等について調べたところ、地域・規模等も異なるため、共通した特徴はみられなかったものの、当該金庫では貸出金の増加が寄与していることが確認できた。また、貸出金の増加は業種全般に亘るものではなく、一部の業種において大きく増加している(図表4)。

(図表4) 上位10金庫の貸出金増加要因

地域別	該当金庫数	貸出増加の主な要因
都市圏	4金庫	・不動産業の増加 ・製造業、建設業、卸小売業、サービス業の増加
地方圏	6金庫	・不動産業の増加 ・金融業・保険業の増加 ・地方公共団体の増加 ・個人(住宅・消費・納税資金等)の増加

(備考) 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

日本銀行による追加利上げに伴い、「金利のある世界」が到来する中、一部の信用金庫では金利優遇の定期預金キャンペーンを再開するなど、預金獲得へ戦略転換を図る動きがみられる。その際、預金調達後の資金運用を見据えた営業活動を行わないと、預貸率の変動に影響を与えるものと思料される。

一部の信用金庫において預貸率が上昇しているように、各信用金庫においても、営業地区の特性等を勘案し、戦略的な貸出推進を行うことで預貸率の上昇につながる可能性はあるものと考えられる。

以上

※信用金庫業界の各種データは、信金中央金庫 地域・中小企業研究所ホームページの「信用金庫統計」(<https://www.scbri.jp/publication/toukei/>)に掲載されています。併せて、ご活用ください。

本レポートは発表時点における情報提供を目的としており、文章中の意見に関する部分は執筆者個人の見解となります。したがって、投資・施策実施等についてはご自身の判断をお願いします。また、レポート掲載資料は信頼できると考える各種データに基づき作成していますが、当研究所が正確性および完全性を保証するものではありません。なお、記述されている予測または執筆者の見解は予告なしに変更することがありますのでご注意ください。